

受講番号 19044 学校名 中村高等学校 氏名 久米田 英洋

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 41名
科目名 英語Ⅰ 単位数(授業時数) 4時間 使用教科書名 EXCEED English SeriesⅠ(三省堂)

クラスの様子・特徴

高校1年生約200名のうち上位82名を選抜した2つのクラスのうちの1つ(男子19名、女子22名、計41名)である。生徒同士の活動を取り入れた授業を展開することにより、読解能力を高められるのではないかと考える。

問題の確定

フレーズ毎に意味を確認し、直読・直解していくことで、読解力・速読力をつけさせることが出来るのではないかと考える。

予備調査

A 授業の観察

特進クラス(男子19名、女子22名の計41名)ということで理解力の高い生徒が多いが、逆に間違いを恐れる傾向がある。授業中に与えられたタスクはこなそうとする態度が見られるため、授業の進め方によっては成果をあげられると思われる。

B 生徒による授業評価

ペアでの音読活動を取り入れた授業の評価は楽しい・眠気が飛ぶ授業だ等の意見もあったが、プリントが主の授業は、分かりにくい、授業進行スピードが速いとの意見であった。予習に関しては半数以上が殆どしていないとの結果であった。

C 学力データ

4月の学力調査結果。正解率(学年全体%-対象クラス%) : 語彙65.3%-76.8%、文法69.0%-78.6%、文構成69.4%-83.4%、読解53.3%-67.3%となっている。クラス内の学力差もあり、下位層は60%台となっている。

リサーチ・クエスト

フレーズ毎に内容を理解していくことで長文を苦手としている生徒が長文を抵抗無く読めるようになるのではないかと考える。

仮説・実践・検証

仮説1

意味のまとまりを表すスラッシュが入った英文を読まずに、長い文章でも抵抗感なく読解しようとするのではないかと考える。また、英文を後ろから日本語訳をしてみたら日本語にすることは出来ないのではないかと考える。

実践1

教科書の本文を読解させ、理解できなかった英文にチェックを入れさせ、その後スラッシュの入ったプリントを配布し、読解が難しいと思った文をもう一度、フレーズ毎に意味を確認していく。

検証1

結果としては、完璧な日本語にすることがなくなり、1時間で読める英文は増えた。「長い文章でも理解しやすい」、「部分部分の意味が分かりやすい」との反応があった。英語の語順が定着していない生徒には「何が?」「どうした?」「何を?」「どのように・どこで・いつ・なぜ?」と合の手をいれてあげる必要性があった。

仮説2

英語をフレーズ毎に声に出すことにより、作業的な活動になりがちなフレーズ毎の意味確認が活発になり、ペア活動で英語を読みあうことで、フレーズ毎に前から理解することが定着し、英語の語順に慣れる手助けになるのではないかと考える。

実践2

英文の内容を確認した後に、十分に時間をとりペアでの音読活動を取り入れる。1. お互いに1文ずつ音読し、発音チェックをする。2. フレーズ毎にパートナーの後にシャドーイングする。3. パートナーのフレーズ毎の英語を日本語にする。4. パートナーのフレーズ毎の日本語を英語にする。以上の4パターンを実践することで英語の語順に慣れさせる。

検証2

音読活動を取り入れた結果、授業が活性化し居眠りをする生徒が少なくなった。しかし、ただの音読作業になっている生徒にとっては英語の語順には慣れさせる活動にならなかった。また、フレーズ毎の英語から日本語、日本語から英語は時間がかり過ぎたため、ルックアップリーディングや単語を本文から消した穴あきプリントを使用し、活動に取り入れた。ペアでの音読活動は生徒にとっても退屈ではないようで好評であった。

仮説3

実際に多くのフレーズリーディングをこなしていけば、意味のまとまり毎に内容を確認するためにはどの箇所でもスラッシュをいれればよい感覚的につかめて、長い文章でも抵抗感なく読解でき、リーディングのスピードが速くなるのではないかと考える。

実践3

生徒自身で今まで活動してきた経験を生かして、英文にスラッシュを入れさせ読解をさせる。また、ペアでお互いにどこにスラッシュを入れたのかチェックさせた後、フレーズリーディング用プリントで一気の内容をチェックする。少しずつ1時間で取り扱う英文量を増やしていくことで、長文への抵抗感を減らしていく。

検証3

12月のアンケート結果によると英文を前からフレーズ毎に読解する方法は、約83%の生徒が慣れ、約90%の生徒にとって長文を読解する時に役に立っていると答えた。1時間で扱う英文の量は1学期に比べると増えているにも関わらず、長文へ対しての抵抗感がなくなり、頑張って読解しようとする姿勢は出来てきたようである。しかし、逆に読もうとする姿勢が読解時間を延ばし速読力をつけるという目標には至らなかった。

研究の成果

フレーズリーディングで読解していくことにより、1時間で扱う英文の量は増えた。また、音読活動を多く取り入れることで生徒は居眠りが出来ず、結果として授業の活性化につながった。模試の得点にこそまだ表れていないが、模試においても読解問題に挑戦しようとする姿勢が見られるようになってきた。また、授業を活性化することでアンケート結果によれば約76%の生徒が英語を好む傾向にあるのも成果の1つであると考えられる。生徒の実態把握→仮説→実践→検証を継続していく必要があると実感した。

今後の授業改善の課題

レッスンが進むにつれ取り扱う文法事項が難しくなり英文の難易度も上がり、意味のまとまりをつかみにくくなってきている。そのため語彙・文法・構文の並行した指導が必要と思われる。また、英語の語順がまだ定着していない生徒への対応として、課題の提出確認を定期的に行うこと、そして1つ1つのタスクにおいて達成感のものを知らせる必要がある。最終的には速読へつなげていく方法を検証していきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話 0880-34-2141 電子メール